



竹村産業株式会社は正藍染の生地で織った剣道着、袴などを製作するとともに、剣道具や剣道着、袴に使う生地を製造業者に供給している。埼玉県指定伝統的手工芸品の指定を受けている



創業から100年以上の歴史を持ち、代表取締役の竹村恵司さん(60歳)は四代目にあたる

日本でつくる 剣道具

—— 剣道具の製造工程、すべて見せます

撮影=窪田正仁

第11回 藍染めとジーンズはどこが違う？

剣道着や袴、あるいは防具の生地「藍染め」は、剣道をする人にとっては身近であり欠かせないものだ。藍染めは天然の植物である藍に含まれる「インディゴ」という色素によって染められている。ところで、アメリカ発祥のジーンズ、いわゆるデニム生地も「インディゴ」によって染められているが、両者は何が違うかご存知だろうか。

川辺さんとともに、「藍染めの町」として知られる埼玉県羽生市の竹村産業株式会社を訪ねた。数回に渡って藍染めについて紹介するが、今回はまず藍染めの歴史をざっとたどってみることにする。

藍は人類最古の植物染料とされ、インドでは紀元前2000年ごろに藍染めが始まった

業になったが、15〜17世紀以降、インド藍が伝わりウオールドに取って代わった。一方、日本の藍染めはインドシナ原産の「蓼藍」を用いたもので、飛鳥時代には伝来したと言われ、奈良の大仏の開眼供養会で使用された藍染めの絹の紐「開眼の縷」は、現存する最古の藍染めとして正倉院に保存されている。

1880年、ドイツの化学者が天然インディゴとまったく同じ成分構造を持つインディゴの合成に成功した。この化学インディゴがその後主流となっていく。アメリカ開拓時代に作業着としてつくられたジーンズは当初は天然藍で染められたとも言われるが、最初に製品化されたリーバイスのジーンズは化学インディゴで染めたもので、それが一般に広まり現在に至っている。ただし日本では天然藍で染めたジーンズも売られている。

「色素は一緒で、まったく同じ化学構造を持っているんですね。ただ色合いも少し違いますし、色落ちが違ったりするんです」と、竹村産業の代表取締役・竹村恵司さんが両者の違いを教えてくださいました。

「剣道をする人も一般の人も、藍を使った藍染めと合成インディゴを使った染めは一緒だと認識していると思います。私も何年前前に



案内人
川辺尚彦
(株)全日本武道具、
(株)日本剣道具製作所代表取締役

ここにきて教えてもらって知ったことです。自分たちの剣道具の製造も藍染め生地が原点ですよ。この生地がなくなったら本物がなくなりそうです」と川辺さんが言う。

「武州正藍染」の「褐色」は 武士に好まれた伝統色

明治の自然主義作家・山花袋の小説『田舎教師』(明治42年発表)は羽生を舞台に実在する人物をモデルにして書かれているが、「四里の道は長かった。その間に青縞の市の立つ羽生の町があった」で始まる。「青縞」とは糸を染めてから織るために生まれる自然のストライプのことで、この地方の藍染めの代名詞となっていた。羽生市と、隣接する加須市、行田市など埼玉県北部は、利根川の水と肥沃な土地に恵まれて藍や綿の栽培に適しており、江戸時代後半から藍染めが盛んだった。

竹村産業の創業は明治27年、恵司さんは四代目にあたる。現在は羽生、加須、行田で生



天然の藍からつくられた「藍玉」を、深さ1.2mという藍甕の中で発酵させて染料をつくる

産される藍染めが「武州正藍染」として特許庁の「地域団体商標登録」を受けており、その組合には八軒が加盟しているが、藍染めを手がけているのはそのうちの四軒だけである。「農家の副業として始まって発展したのですが、かつては200軒ぐらいが手がけていたんです」

と竹村さん。そもそもは農家の主婦が自分たちの野良着をつくるために藍染めを始め、次第にその生地や織物を市で売るようになっていた。野良着や半纏、足袋などが出荷され、明治時代後半に最盛期を迎える。明治時代から大正時代にかけては郵便局員や国鉄職

員の制服にも藍染めの布が使われており、当時の日本人には身近なものだったのである。竹村さんによれば洪沢栄一も一役買っていたという。「日本資本主義の父」と呼ばれる明治・大正の実業家である洪沢は、利根川のさらに上流にあたる深谷出身で、実家は藍を栽培し染料となる「藍玉」を製造し、他の農家のものを含め藍玉を紺屋（藍染めをする業者）に販売していた。洪沢の実業家としてのスタートは藍の販売だったのである。

昭和40年代ごろに農業の機械化が進み、農家の人々の衣服も変化し、また合成インディゴが日本でも一般に使われるようになったこ

となどから、藍染めの需要は減っていった。「もともとは染め屋（紺屋、機織り、糸巻という具合に分業制でやっていました。染め屋はたくさんあってこの工場は機織りだったのですが、私の時代になって染め屋さんがほとんどなくなってきたものでした）ですから、自分のところで染めも始めたんです」

と話す竹村さんは、茨城県の紺屋で学ぶなど試行錯誤しながら染めを学んだ。30年以上経った今、藍染めを手がける業者は激減し、現在の状況になった。

藍の産地としてよく知られるのは徳島県の吉野川流域である。今もそこでは藍が栽培さ

れており、竹村産業をはじめ武州藍染めの業者も徳島産の藍玉を使っている。藍染めはかつて全国各地で行なわれ、今も徳島のほかに遠州藍として知られる静岡をはじめ各地に残っている。剣道関係ではかつて西日本は静岡、東日本は武州と言われていた。

現在では稽古着、袴、防具ともに中国、ミャンマーなど海外で合成インディゴを使って染めた生地を使ったものが大半で、天然藍で染めた日本製の生地はごく一部だが、そのうちの8割が武州藍染めとなっている。

その理由として独特の色合いがある。竹村産業の会社案内に「藍染の色いろ」と題した色見本が掲載されている。青い色の濃さによって10種類の色があり、薄い方から「莞のぞき」「水浅葱」「浅葱」「濃浅葱」「薄納戸」「納戸」「濃納戸」はまだ「紺」「褐色」となっている。一般的な表現をすれば濃い水色から黒に近い濃紺までの間に、それだけの段階があるという繊細さに驚かされる。

一番濃い「褐色」はコーヒーのような茶と黒の中間の「かつしよく」とは異なり、「かちいろ」つまり「勝ち色」と読んで、鎌倉時代から武士に好まれたのだという。次回以降に詳しく述べるが、その流れを汲み取ることか、剣道関係では濃い紺が好まれ、その傾向は近年ますます強まっている。それに応えているのが武州藍染めなのである。ただ、その濃度を出すためには、天然藍に合成インディゴを混ぜる必要もあるのだという。

天然素材による藍染めの生地は武州の四軒だけが支えている。面金を手がける会社は日本で三社のみだったが、藍染めについても同じような状況なのである。